

# 講演 美人の運命を、古典に見る

## 井上 章一

「かぐや姫」と五節の舞姫

采女とよばれた女たち

『大和物語』から能楽にいたるまで

『竹取物語』の「かぐや姫」は、都の貴族や王の求愛をしりぞけている。『シンデレラ姫』をはじめとするヨーロッパのメルヘンは、王子との結婚で話をむすぶ。その点では、まことに対照的なつくりになっている。

どうして、「かぐや姫」は王のもとへいくことを、きらったのか。王朝のどこが、どうしていやだったのか。彼女が王朝をいやがりきらうヒロインとして造形された背景を、日本文芸史にさぐっていく。そのなかで、王権のもつ芸能プロダクションめいた側面に、光をあててみたい。

## 「かぐや姫」と五節の舞姫

「かぐや姫」の話を、今日はいたします。

といっても、その荒筋はみなさん、よくごぞんじでしょう。絵本などをつうじて、ちいさいころからなじんでこられたと思います。今日も、そのこまかいところへわけいて、あれこれのべるつもりはありません。

ただ、「かぐや姫」が王の求愛をしりぞけたところは、かんとたんに見すげえない。私は、そこに興味をいただきます。今日も、この点的をしぼって、話をすすめることにいたします。

姫は、竹のなかから見いだされました。竹取の翁たちにひろわれ、彼らのもとでそだちます。たいそう美しくなりました。かがやくばかりに美しい。「かぐや姫」というわけです。

美貌のうわさは、都にもとぎまりました。貴族たちも評判にそそられ、姫のすむ在所へやってきます。プロポーズをする者も、でてきました。ついには、王まで姫をむかえたいと、言うようになるのです。

しかし、姫はそれらをうけつけません。みな、しりぞけました。王のもとめさえ、はねつけてしまったのです。

「かぐや姫」の話は、平安前期になりました。『竹

取物語』として読みつがれてきたことは、よく知られるとおりです。ただ、『竹取物語』にえがかれたさまざまな背景は、天武朝期らしくなっている。これは、奈良時代を平安期にしのぶ、回顧的な作品でもあったのです。

姫にふられたのも、天武天皇にほかありません。故実のわかった平安期の宮廷人なら、たやすくそのことのみこめたはずです。はあ、これは天武の君が在所の娘からすげなくされた話だな、と。

天皇のプロポーズを、市井の娘が袖にする。なかなか、あじわい深いストーリーです。反天皇制思想でもが、この話にはこめられていたのでしょうか。

『シンデレラ姫』は、一国の王子が町娘のなかから王妃をえらぶメルヘンです。王子に見められた姫が、王子をきらうようなくだりはありません。いろいろトラブルはあるのですが、フィナーレでは王子とむすばれます。それで、めでたしめでたしというような話になっています。

『白雪姫』も、『ねむれる森の美女』も、まあ同じようなものでしょう。王家からの求愛を拒絶する町娘の話は、ヨーロッパのメルヘンに、見いだせません。

でも、『竹取物語』の「かぐや姫」は、王じしんの求愛をはねつけました。ヨーロッパのメルヘンではありえないふるまいを、見せつけたのです。王権忌避とも思われかね

ない行動を、しめしたと言ってもいいでしょう。

くりかえしますが、『竹取物語』は平安時代の前期にできました。物語のさきがけをなした読み物だということになっていきます。京都の宮廷でも、そういう作品だとみなされ、うやまわれてきました。反王権的なところもある話が、宮廷でも読みつがれてきたのです。

これは、いったいどういうことなのでしょう。平安期の王朝は、王権がないがしろにされる物語も、たのしみながらうけいれる。それだけのゆとりとおおらかさが、王朝にはあったのでしょうか。

「かぐや姫」と求婚者たちのふるまいには、もうひとつおかしなところがあります。

姫にことわられた貴族たちは、こう竹取の翁につけてもいました。自分たちの愛がうけいれてもらえないのなら、それはしょうがない。なら、せめて、姫のお顔を一目おがませてはもらえないだろうか、と。しかし、姫はこのややひかえ目な申し出も、ことわってしまうのです。

現代人の私は、ここにとまどいます。物語の貴族たちにも、言ってやりたくなってくる。

お顔だけでも、見せてほしいんだって。おいおい、お前たちは、まだ姫の顔を見ていないのか。姫の美貌にあこがれて、プロポーズをしたじゃないの。せめて、顔をおが

みたいて、いったいどういうことなんだ。美貌の評判だけで、お前たちはまいあがっていたのかい？

でも、平安期の宮廷を生きた読者なら、こういう違和感をいだかないでしょう。ひっかかることもなく、読みすすんでいくと思います。

イスラム教の女性が、顔をチャドルでおおっていることは、よく知られています。彼女たちは、不特定の人々に顔がさらされることを、きらいします。極端な場合は、両目以外の顔を、すっかりおったりもします。カトリックなんかでも、信徒の女性は顔をヴェールでおおうのが、常でした。一九世紀までは。

平安期の宮廷女性も、顔はかくしながら、くらしていました。被衣かすきとよばれるマント状の布で、おおいかくしていたのです。外出のさいには、萱笠すげがさ、市女笠いちめがさとよばれた笠をかぶりしました。縁の巾がひろく、顔をかくす役目もはたす、まあ帽子です。女性によつては、その笠からさらに帋むしのたれ垂網さなをたらし、より用心深く顔をかくす女性さえいました。

それだけ、素顔を見られることが、平安の宮廷女性にははずかしかったのです。顔を見せてくれとたのまれた「かぐや姫」は、この注文をことわりとおしました。その姿勢にはまちがいなく彼女たちの心模様が、投影されていたでしょう。素顔なんか、人前で見せるものじゃないという

心情が。

奈良時代の宮廷女性に、しかしこういうのはじらいはありません。天武朝の女官も、顔をとりにてかくしはしませんでした。顔をあらわすことがためらわれるようになったのは、平安以後のことです。

その意味で、『竹取物語』の女性観は、平安王宮のそれによりそっていると評せます。物語じたいは、レトロスペクティブに天武朝へさかのぼっていたかもしれませんが。しかし、主人公の姫は、平安女性らしいはじらいを身につけていました。平安期の感性で、奈良期の天武朝時代をえがいた作品だったということでしょうか。

しかし、そういう平安期にできる美人の評判は、ちょっとあやしかったかもしれません。なにしろ、うわさの対象となりうる女性は、顔をかくしていたんですからね。美人かどうかをたしかめるのは、むしろしかったような気がします。

口達者な従者がいれば、それだけで評判はできたかもしれませんね。うちのお姫様は、美人ですよ。と、そう口八丁手八丁でふれまわれれば、彼女の美人神話も一丁あがり。そんな時代だったのではないのでしょうか。だから、「かぐや姫」をもとめた貴族がうわさだけでわきたつことも、ありえたわけです。まあ、これはちょっと言いすぎかな。

平安時代の宮廷には、五節の舞姫とよばれる女性たちもいました。新嘗会にいなめえや大嘗会おおなめえで舞を披露するおどり手たちです。国司や貴族の娘たちから四、五人がえらばれていました。宮廷をいろいろページェントの、その花形ではあったでしょう。

歴史家の保立道久さんに、彼女たちと「かぐや姫」をつなげた論文があります。『竹取物語』と王権神話——五節舞姫の幻想」がそれです。『物語の中世』（一九九八年）という本に、おさめられています。これが、たいへんおもしろい。

五節の舞姫たちは、宮廷儀礼の舞を、素顔でおどりました。顔はかくさずに、観客の前でさらしながら、そのつとめをはたしていたのです。宮廷では、顔をかくすのが女性のたしなみだとされていた時代にね。

舞姫は、いちおう天女になぞらえていました。天女が顔を見せないのはへんだと、そうみなされていたのかもしれないですね。

また、天女ですから、美しい女性であることも、おのずともとめられました。その点でも、ページェントのさいには、美しい顔をさらさねばならなかったわけです。天女の舞いが、新嘗会の儀式にさいして、くりひろげられていく。このたてまえをはずせば、事実上のミスコンテストだった

かもしれません。

保立さんは、そこに注目をしたのです。あの時代に、舞姫たちは素顔をさらしながら、おどりました。まるで、ミスコンの出場者が水着姿で舞台へたつように。それは、さぞかしはずかし、またつらいとめだったろうと、保立さんは考えます。その羞恥心が、顔のうかがえない「かぐや姫」へと造形されていく。これが、保立さんの読みときです。

舞姫としてのつとめに、ややげびた印象のあったことはたしかでしょう。『源氏物語』で、娘を舞姫にしろと言われた惟光は、いやがります。「からいことに思」うのです。

『紫式部日記』にも、舞姫の入場を見た式部は、こう書きつけました。「火の光、昼よりもはしたなげなるに、あゆみいるさまもあさましよう。つれなのわざや」と。

もちろん、自分の美貌を公然とアピールできて、ほこらしく思えた娘もいたでしょう。ミスコンでも、自信満々にふるまえる女性がいるのと同じで。でも、宮廷の良識は、それをあさましいつとめだと、考えたのです。「かぐや姫」の背景に、舞姫のいた可能性は、じゅうぶんあるでしょう。それに、何度も書きますが、舞姫は天女として位置づけられていました。この設定は、月へとかえっていく天女であつた「かぐや姫」とも、ひびきあうのです。天女Ⅱ「か

ぐや姫」も、宮廷人に素顔を見せたがりませんでした。それは、新嘗会を口実に顔の品定めがおこなわれる舞姫の心理とも、つうじあう。その可能性は、じゅうぶんあると思います。

五節の舞姫を天女に見たてる考えは、天武天皇の時代にさかのぼる。そう、平安期の宮廷では考えられていました。天武天皇が吉野で、天女の舞を見た。その伝承にあやかつて、平安王朝は五節の舞をいとなむようになったのです。

保立さんの読みときは、そこにも光をあてています。天武の時代に、五節の舞姫は、その源流がさかのぼりうるとみなされていました。だからこそ、舞姫めいたところもある「かぐや姫」の話は、天武期にもちこまれる。天武帝を袖にする天女の話になったというのです。

私のつたえ方には、伝言ゲームめいたミスもあるかもしれませんが。興味をもたれた方は、ぜひ保立さんの本へ、直にあたつて下さい。「かぐや姫」の背後に、どのような宮廷でのならわしが、ひそんでいるのか。そこが、ていねいにほりおこされています。

ただ、私はこのおもしろい保立説を、まるごと受け入れることができません。もうひとつの見方もありうるんじゃないかと、思っています。これからは、私流のちがう読みときを聞いていただくことに、いたしましょう。

もとより、私は国文学の古典などに、なじんでいません。研究者としては、江戸期以後をあつかってきました。しかも、建築や風俗をテーマにして、『竹取物語』に関しては、まったくの素人です。今からお話することも、素人の与太話でしかないような気はします。素人だからこんなことも思いつけるのか。そううけとめて下されば、これにすぎることばございません。

### 采女とよばれた女たち

大化改新が六四五年にあったと、私たちは学校でならいます。中大兄皇子が中臣鎌足にささえられ、蘇我氏の専制をくつがえした。朝廷が中心となるしくみが、それととのいだと、おそわってきました。

ですが、改新が采女のきまりをさだめたことは、つたえられません。教科書にも、のせられてはきませんでした。なぜでしょうか。それは、采女の性格がのみこめれば、おのずとわかってくるでしょう。ああ、なるほど、そんなことなら、学校では語りにくいな、と。

采女は、大和の王権が、地方の領主たちにさしだせた若い娘たちのことをさしています。大化の改新がさだめた詔（六四六年一月）には、こんなきまりがしるされているのです。

「凡そ采女は郡少領以上の姉妹及び子女の形容端正なものを貢げ」。

なんとあつかましい。改新政府は、地方領主に、女をみつげと言っているのです。それも、ただの女ではありません。領主の姉妹か娘で、「形容端正」な者、つまり美人をよこせと言っているのです。

大和の王権も、面喰いだったんだなあ。権力をかさにきて、美人をおくりこめだなんて、あんまりだ。と、そんなふうにならなから思われてしまうのを、はばかってきたのでしょう。この部分がふせられてきた事情じたいは、わからなくありません。

まあ、大化改新については、そのあったことをうたがう学者も、おおぜいいます。中大兄皇子の大活躍も、あやしうないかと思える歴史家は、すくなくあります。その意味では、この時美人あつめがおこなわれたかどうか、わからないわけです。

ですが、八世紀初頭に養老令が制定されたのは、まちがいありません。その発令をうたがう研究者は、まずいないと思います。そして、その養老令でも、采女についてはこうさだめられていたんですよ。

「其れ采女を貢ぐは、郡少領以上の姉妹及び女の形容端正なる者を、皆な中務省に申して奏聞せよ」。

やはり、書いてあるでしょう。きれいな女をえらんで、中央政府へとどけなさいって。大和の王権は、それだけ美人あつめに力をいれていたんですよ。このことは、もう否定のしようがありませんね。

じゃあ、なんのために朝廷はそんなことをしていたのでしょうか。そもそも、采女って何だったんでしょうかね。

てつとりばやく言えば、采女は天皇のそばにつく接待係でした。飲食のお世話をする女の人ですね。今、似たような仕事をさがせば、ナイトクラブのホステスさんあたりかな。「形容端正」な、天皇専属のホステスさんを、王権は各地からあつめていたんですよ。

おそばにつかえるつとめですからね。天皇が采女に手을 だす、つまり性交にまでいたることは、ままありました。クラブの客が、時にホステスさんと寝ることがあるようにね。

それで、天皇の子を生んだ采女も、けつこういたんですよ。まあ、正妻のなした皇子じゃありませんから、なかなか皇位にはたどりつけません。でも、天智天皇なんかは、伊賀采女宅子の娘に生ませた大友皇子を、重んじます。次期天皇にしようとさえしました。そう、采女はわずかながらですが、皇太后になる可能性もひめていたのです。

ついでに言いますが、天智天皇は中大兄皇子その人です。

大化改新を彼がやってのけたのかどうかは、よくわかりません。改新で、全国の美人が宮廷へあつめられていたのかどうかも、ね。でも、采女に皇子をうませていたのは、たしかです。

あと、伊賀采女という呼び名にも、説明をしておきましょう。これは伊賀の領主からおくられてきた采女であることを、しめします。吉備からとどけられた采女は、吉備采女になりますね。みな、故郷の地名を頭にそえるかつこうで、よばれていたわけです。

彼女たちは、奈良の都で、王宮でくらすことになりました。しかし、その生活費を、王権はだしません。くらしをささえる経費も、王権はみな地方の領主にださせていました。

かさねがさね、あつかましい権力だなど、そう思われるでしょう。しかし、地方領主たちは、そのために采女用田をいとなむことが、みとめられました。公地公民のたてまえにとつては、ぬけ道ともなりうる農地をたもつことができたのです。領主側にとつても、悪い話でしかなかったわけではありません。それなりに、うま味もあったのです。また、自分のおくりこんだ采女をつうじて、朝廷とつながるだけでも、領主はさぐれました。采女が天皇の子をなせば、その可能性はますます高まりました。



采女の子が、皇太子になることは、ほとんどなかったと思います。伊賀采女の大友皇子は、例外的なケースでしかありません。しかし、采女が男児をなせば、領主が彼をひきとりあとつぎとすることは、ありました。領主は、そうすることで、ロイヤルファミリーの一員にもなれたのです。

くりかえしますが、地方領主は采女のきまりを、いやがってはいませんでした。そこを足がかりとしながら、自分の勢力をのばすことも、もくろんでいたのです。

ただ、八世紀も後半ごろになると、天皇は中央貴族とのつながりを強めます。平安時代には、ますますその傾向がいちじるしくなりました。

地方からさしだされた采女に、天皇が手をつける機会も、おのずとへりだします。采女が存在感も、弱くなっていきました。平安時代には、ただ料理をはこぶだけの配膳係になってしまったと、考えます。クラブのホステスさんではなく、料亭の仲居さんなぐいになったといったところでしょうか。ずいぶん、采女にこだわってきました。その歴史を、ながながと聞かされ、いぶかしく思われた方もおられるでしょう。もちろん、この力こぶをこめた説明には、訳があります。私が「かぐや姫」のことを、采女にもよりそわせて考えたかと思っているからです。

采女もまた、よりすぐりと言っている美人たちでした。五節の舞姫なんかが登場する前は、宮廷を代表する美人アイドルだったと思います。そして、彼女らは、美貌ゆえに地方から中央の宮廷へさしだされた娘だったのです。

都の貴族から声をかけられた「かぐや姫」に、その点は似ています。都へこい、とね。采女のあり方にも、「かぐや姫」の話をなりたたせる何かは、あったかもしれません。私が、彼女たちに注目してきたのも、その可能性をさぐりたいからなのです。

### 『大和物語』から能楽にいたるまで

采女は宮廷のスターだったと、さきほどのべました。そのスターぶりがしのべる歌を、たとえば藤原（中臣）鎌足が、読んでいます。『万葉集』（巻二、九五）におさめられたつぎのような歌が、それです。

「我はもや 安見兒得たり 皆人の 得かてにすといふ 安見兒得たり」  
やすみこ みなひと

鎌足は、天智天皇から安見兒という采女を、さげわたされました。そのことを、あられもなくよろこんでいます。安見兒をもらった、みんなのあこがれる安見兒を手にいれた、と。

まあ、安見兒はあまたいる采女のなかでも、とりわけ美



しかつたのかもしれませんが。すべての采女が、同じようにもとめられていたわけではないでしょう。しかし、天智の時代には、こういうスター的な采女も、いたのです。

まあ、天皇から重臣へプレゼントをするというあたりに、現代人はこだわるかな。女を物としてあつかっている。まるで奴隷じゃあないかという声も聞こえてきそうな気がします。

『万葉集』は、柿本人麻呂がつづった吉備采女の歌も、のせています（巻二、二一八）。彼女は天皇以外の廷臣と恋におち、とがめられるんですね。それは、不敬の罪としてあつかわれたのです。自分の恋がみのらぬ彼女は、けっきよく自らの命をたちました。その自死をとげた「川瀬の道」で、人麻呂はうたうわけです。「見ればさぶしも」と。なにしろ、えりすぐりの美人たちですからね。吉備の彼女にかぎらず、宮廷人に想われた采女は多かったと思いますよ。采女も彼らによるめき、けっきよくは道ならぬ邪恋として、罰をあたえられる。そんなことも、よくあったんじゃないでしょうか。

もちろん、天皇の心をいとめた采女もいたでしょう。想思相愛の仲がなかったとは、言いません。たとえば、天智天皇は伊賀采女を、愛していたと思います。なにしろ、彼女のなした子を、自分のあとつぎにしようとしたぐらいで

すから。

ですがね、采女は地方領主のところから、どんどんおくりこまれてくるんですよ。つぎからつぎへとね。宮廷には、ニューフェイスの采女が、いつもいたんですね。

どうでしょう。いちどは好きになった采女を、天皇はいつまでも愛しつづけたでしょうか。新顔の美人が、いっぱいいるなかで。あっちの采女もいいな、こんどの采女も、よさそうだぞ。とまあ、そんな浮気心も、わいたでしょうね。けっきよくは、天皇にすてられてしまう采女も、多かつたんじゃないかな。

ずつとあと、一〇世紀に『大和物語』という読み物が、まとめられました。

なかには、天皇から相手にされなくなり、猿沢の池へ身をなげた采女の話が、でてきます。

まあ、二百年もあとに書かれた話ですからね。これが、奈良時代の史実をつたえているとは、言いません。

ですが、采女の悲話は、二百年たつても語られつづけました。文芸のなかでは、生きつづけたわけです。地方から宮廷へさしだされた美人が、けっきよくは身をほろぼしてしまふ。『万葉集』でもそのことはうたわれ、『大和物語』でもとりあげられました。

いや、それどころではありません。『大和物語』の話は、

室町時代になって、よりいつそうふくらまされることとなります。世阿弥の作品だとされる『采女』という能楽を、ためしに見て下さい。采女の悲話が拡大再生産されている様子を、われわれはそこに見てとれます。

話は、旅の僧らがさる女性に猿沢池へいざなわれるところから、うごきはじめます。池へ僧を案内した彼女は、彼らに経を読んでくれと、たのみました。昔、この池では、天皇の心変わりをうらんだ采女が、身をなげた。どうか、彼女のために、成仏を念じてほしいというわけです。

もう、ピンとこられたでしょう。僧をその池へつれていった女性こそが、じつは采女の霊だったのです。じじつ、彼女は僧にそのことをつげ、こんどは霊として水中にとびこみます。

天皇につれなくされた采女の物語は、二百年後の『大和物語』に転生しました。のみならず、六百年後の能楽にもつたえられています。采女の悲話は、日本文芸史で愛好される、ひとつの話をなしていたとも、言えましょう。

地方の領主は、「形容端正」な女子を、朝廷へさしだしなさい。そう、律令にしろされた采女のきまりは、命じます。そして、多くの美しい女たちが、都へとどけられることになったのです。しかし、彼女たちは、けつしてしあわせにはなれなかった。不幸な人生をおくる者が多かった

……。

じつさいに、そうだったと言いたいわけではありません。私が強調したいのは、そういう話を、日本文芸史がよろこんだというところです。美貌で脚光をあつめ都なんかへよばれても、ろくなことはない。とまあ、そういった話の型が、一種の伝統をなしていることに、力点をおきたいのです。

「かぐや姫」もまた、この伝統とともにあるとは言えないでしょうか。王朝へいけば不幸になる。あんなところへは、いけないほうがいい。そんな観念を、日本文芸史は最初の物語で、ほのめかしていた。私はそうとらえたいのです。

『竹取物語』に、反天皇制思想があったわけじゃない。だが、日本文芸史は都へまねかれる美人の不幸を、語りついでいきました。「かぐや姫」は、そのさきがけをなす人物像であったと思うのです。まあ、姫は池へ身なげなどをせずに、月へかえっていくのですからね。

人物設定の考案めいた分析からは、五節の舞姫がうかびあがってきます。素顔をかくすふるまいなども、そのこととひびきあう。いかにも平安時代めいたそれですね。そこを、さぐりあてた保立さんには眼力があつたと、思います。ですが、舞姫の悲話をうたいあげた文芸作品は、あまり

ありません。中央貴族の娘たちからえらばれる舞姫には、あまり悲劇的な情感がただよわなかった。やはり、地方からさしだされた娘たちこそが、あわれをもよおしたのでしょうか。理由はわかりませんが、日本文芸史がヒロインとしつづけたのは、采女のほうなのです。

ですから、私は「かぐや姫」を考えるさいにも、采女のことを重んじたい。時世粧という点では、五節の舞姫も、大きな役割をはたしていたでしょう。あるいは、月へかえる天女という設定あたりでも。でも、不幸な美人という造形の根っ子は、采女にあったとみなしたい。

今でも、善男善女は言いますよね。美人だからということで、スカウトから声をかけられても、耳はかさないほうがいい。東京の芸能プロダクションなんかへいけば、おもちゃみたいにされてしまう。テレビや雑誌でかがやいているのは、きらびやかな一面だけだ、と。

私はそういう観念の歴史を、さかのぼっているのです。そして、采女や「かぐや姫」の物語などをひろいだしたというのが、今日のお話でした。

平安時代のなかくらまで、芸能プロめいた組織は見いだせません。ホリプロやオスカープロモーションをしのばせる民間の団体は、ありませんでした。それらしいものがあつたとすれば、宮廷じたい以外には考えられません。そ

う、当時は王朝こそが、芸能プロダクションだったのです。「かぐや姫」は、そんな王朝をきらつたということではなかったでしょうか。

古典研究の現場で、こういうことが論じられたりはしないと思います。素人のとつぴょうしもない想いつきだと、みなさんは感じられたかもしれません。ですが、私のような素人が、学界動向を見すえたような報告をしても、意味はないでしょう。まあ、そういう報告の能力もないのです。が、今日はこれでおしきらせていただきました。

あしからず、御容赦下さい。